

—巻頭エッセイ—

地質標本館における標本研究と博物館としての役割

豊 遙 秋¹⁾

地質標本館は、当所に行っている研究の成果の紹介と、地球科学に関する知識の普及を行う地球科学系の博物館としての役割を果たすとともに、創立以来110余年に亘って本所の歴代のスタッフが採集、研究した岩石・鉱物・化石等の標本約40万点を所蔵し、そのうち約10万点がすでにデータベースとして登録、管理され内外の研究者に対して研究用に提供するサービスを行っている。

近年、地球科学の理論が発展し、実験手法や分析技術、分析機器が進歩して新しい見地からの研究が必要となり、研究上の標本の利用要請は年々増加している。最近の標本の利用件数は年間500件以上に達しこの10年間着実に増加しており、今後も増加する傾向にある。特に鉱物標本の利用は利用件数の8割を占め、地球科学分野に限らず物理学、化学、生物学、医学、農学等の様々な分野の研究に無機結晶物質及び標準物質として分析精度を確認する指標や新材料開発の対象物質として利用されるようになった。

地質標本館が膨大な点数の標本類を所蔵し、我が国では国立科学博物館とならぶ地質標本センターとして内外の研究者に標本を提供し一定の評価を得ているなかで、所蔵標本そのものについてデータベースの基礎データを得るための分類・記載研究はキュラトリアルワークとして欠くべからざるものとなっている。地質標本について得られた様々な情報の体系化、標本データベースの構築、カタログや図録等の作成は標本館(博物館)における主要な研究業務として位置づけられなければならないが、現実には研究業務の成果として認めてもらうことが大変難しいという評価に関しての「ねじれ現象」が生じているのも事実である。

鉱物の分野に限って言うならば、今日の大学においても記載や分類に関する研究についての評価は決

して十分でなく、従ってこうした研究は次第に行われなくなり必然的に若い研究者が育ってこないという現象が起きている。標本館においても特に鉱物の研究者の後継者不足は深刻な問題となっている。このような状況は、最近雨後の筍のように日本各地に新設されている自然科学系の博物館で地学部門の学芸員に鉱物分野の研究者がほとんどいないことにもよくあらわれている。それらの博物館ではどこでも鉱物の展示は展示室の角に追いやられているのが現状である。

かつて上野の国立科学博物館に通い、ガラスケースに額を押しつけて鉱物標本に見入ったり、館の研究者から指導を受けた者にとって、博物館の果たす役割が大きいことを実感する。30数年前と異なり、現在では地学系の展示を行っている博物館又は博物館相当施設は、規模の差はあるが全国に100以上存在するとみられる。これらの施設で充実した鉱物の展示と、優れた鉱物学を専門とする学芸員(キュレーター)がいれば、鉱物ばかりでなく地球科学全般に興味を持つ世代が育つことはまちがいない。水晶や方解石の美しい結晶を前にして、この鉱物がどのような性質を持ち、どのような過程でできたかを解説できる研究者もやはり必要なのである。鉱物学は今や、宇宙、惑星へと研究の領域を広げていて、21世紀にはこの分野が鉱物学の中心になるかもしれないが、しかし鉱物学の基礎を支える標本を中心とした分類・記載の研究なしでは存在しえない。“博物館的な”分類・記載研究を正當に評価し、それらの研究の体系化、データベース化、カタログ作成等の作業が標本館における業務として真に位置づけられ、当館が名実ともに我が国唯一の地球科学に関する総合博物館となるとともに、地質標準物質を扱う地質標本センターとしても21世紀の地球科学の発展の一翼を担えればと考えている。

1) 地質調査所 地質標本館

キーワード: 地質標本館, キュラトリアルワーク